

令和7年度 喜久田中学校便り

朝日輝く丘の上



第 11 号

発行日：令和7年6月17日

文責：校長 物井 隆

連絡先：959-2204

父の日に思うこと

日曜日は父の日だった。もうずいぶん前の5月に私の父親は死んだ。私は涙が流れた。生前、父親がよく言っていた「人に泣きっ面を見せるもんじゃねえ」と言う言葉も忘れて泣いた。

父は膵臓（すいぞう）ガンだった。夏のある日、母の一言から始まった。「お父さんの顔、黄色くなっているんだけど…」と。その日、病院に連れて行った。「黄疸（おうだん）」が出ています。黄疸というのは肝臓に異常があるという印（しるし）であることを後から知った。つまり、この時点で膵臓のガンが肝臓へ転移していたのかもしれない。その日から生活が一変する。父親の入院。母親が付き添い。自分一人の生活。大学時代に経験したことのある一人暮らしであったが、安心できない不安な一人暮らしであった。しばらくして母から「今日は一緒に病院に行ってくれない。先生から説明があるから」という言葉があった。病院で「膵臓ガンです。手術に全力は尽くしますが覚悟して下さい」医師からの言葉であった。あの時の母の落胆した顔は忘れられない。「きっと大丈夫だよ。」自信のない呟（つぶや）くようなはげましを言うのが精一杯だった。

私はその当時、大学を出たばかりの初心者マークを付けた教師であった。学校で一番、仕事ができない教員であった。そんな役立たずの自分ではあったが、部活動の顧問をしていた。運動部の顧問だ。自分がやったことのない競技だった。指導力不足。その言葉がぴったりの教員であった。当然、指導力不足の素人監督では、春の中体連では勝てなかった。いや勝たせてあげることではできなかったのだ。でも生徒たちは「勝ちたい、勝ちたい」と言っていた。私も勝ちたかった。勝たせたかった。競技についての勉強もとても頑張った。夏休みは自分でもこんなに頑張ったことのないくらい練習させた。自分も若かったので、一緒に練習した。

父親の手術の日が決まった。顧問は私しかいない。他の先生には言えなかった。新人戦…。ちょうどその日の午後2時から手術が行われることに決まった。勝ちたい。勝たせたい。だけど…。その気持ちが揺らいだ。午前中で負ければ父親の手術に間に合う。負ければ不安な気持ちでいる母親のそばにすることができる。負ければ…。負ければという気持ちが「負けろ…」という気持ちに変わるのに時間はかからなかった。いよいよ新人戦。最低の自分のチームが負ければいいと考える顧問が率いるチームは、顧問の気持ちとは裏腹に快進撃を続けた。10時、11時と時間は過ぎていった。誰にもいえない胸の中の気持ちを隠して、やっと作った笑顔で頑張れと言う自分が情けなかった。どきどきした気持ちで…。また勝った。作り笑顔がまた苦しかった。

2時…。あっという間に、その時間が来てしまった。もう試合の中に自分の気持ちはなかった。決勝戦、優勝。喜ばしい出来事が自分の目の前で繰り広げられていく。しかし、その輪の中に入れないう心のもっていない作り笑いで、ニタニタしている最低の顧問がいた。仕事をする人間として最低…。親を励ませない失格息子…。どうしようもない気持ちの自分がそこにいた。運良く父親の手術は成功した。しかし、また次の年の春、病気が再発し、帰らぬ旅路へ…。

父の日になると、あのどうしようもない新人戦の時の気持ちが思い出されてならない。あのどうしようもない気持ちが…。しかし、あの時の感情は父が教えてくれた大切なことだと思う。父親が与えた息子への遺言だったのかもしれない。「仕事を大切に、責任を持ってやりなさい」「家族を大切に思いやりなさい」という遺言のように、今は思えて仕方がない。きっと命を張って、男として教えてくれた遺言だときっと思う。